

平成 30 年度研究成果公開促進費(学術講演会等)成果報告書

【報告者所属・氏名】

生活科学部・生活文化学科 高橋桂子

生活科学部・生活文化学科 細江容子

【タイトル】

Family Life Educator による個人・家族・コミュニティの生活支援

【講演者所属・氏名】

Dawn Cassidy, M.Ed., CFLE (米国)、NCFR、FLE ディレクター

Chen Jo-Lin, Ph.D. (陳若琳;台湾)、輔仁大学副教授、台湾家庭生活教育専門家協会理事長

Cho Hee-Keum, Ph.D. (趙熙今;韓国)、大邱大教授、韓国家政学会会長

倉元 綾子, D.M. (日本)、西南学院大学教授・前日本家政学会家政教育学部会長

※両日の総合司会:高橋桂子、12/2 午後セッション司会:細江容子

【開催日時・場所・来場者数】

◆日時:平成 30 年 12 月 1 日(土) 18 時 30 分 ~20 時 00 分

内容:welcome party

場所:本学渋谷キャンパス 9 階、カフェテリア

来場者数:28 名

◆日時:平成 30 年 12 月 2 日(土) 9 時 00 分 ~15 時 30 分

内容:国際シンポジウム

場所:本学渋谷キャンパス 503 講義室

来場者数:43 名

【学術的な成果】

国際シンポジウム当日は米国、台湾、韓国それぞれ 1 時間使って、下記の点を講演いただいた(①Family Life Educator(以下、FLE)の目的・内容・現状(役割・有効性、意義・インパクト、具体的活動、事例)、②FLE 成立の社会的背景・歴史、③各国における FLE に関する学問分野・学会・関係機関とそれらの貢献、④CFLE 養成のシステム)。製本資料に加え、母国語と日本語の二か国語で PPT に同時投影し、さらに外国からの登壇者には英語版を配布した。

米国では外部試験作成機関と連携していること、試験問題は毎年チェックするもののマイナーチェンジにするよう留意していること、台湾では年齢層別に FLE を展開しており、それぞれのライフイベントに対応した防的・教育的側面からアプローチしていること、韓国では FLE が国家資格となるよう政治に働きかけてきたが、紆余曲折があった点を詳細にお話いただいた。

昨年度より「家庭生活アドバイザー」の資格認定を行っている(一社)日本家政学会からは、現・旧の会長、副会長をはじめ多くの参加者があった。FLE が行う支援は、個人・夫婦や高齢者など生活主体にとどまらず、日常生活の基盤であるコミュニティ全体に対して予防的・教育的視点で支援して well-being

を高め、社会関係資本の強化を可能にする。4 か国の登壇者の講演・質疑応答や discussion を通して参加者それぞれがこれらの点を再確認・認識することができた点は、大きな学術的成果といえる。

【広報面での成果】

作成したフライヤーは、(一社)日本家政学会での全国大会や各種部会夏季セミナー、家庭生活アドバイザー研修、家庭科教員組織への配布に加えて、日本家政学会にメールマガジンの配信依頼(2回)、直接PRなどで行った。

後日、頂いたメールを何点か紹介する。

「大変良いシンポジウムでしたね。

とても勉強になりました。

なにより先生方の企画力と行動力は素晴らしいです。」

「先日はありがとうございました。

学会としても今後を占う大テーマであるにもかかわらず

貴大学において、会場と時間を確保していただいた上に

開催経費を含め各担当者の動員まですべてご負担をおかけして

自身、忸怩たるおもいでいっぱいです。

心から感謝申し上げます。」

実践女子大学の教員の研究に対する姿勢、教員間の団結力などもPRできたと考える。

【今後の課題・展開】

FLE に関しては生活科学部の母体である日本家政学会が取り組んでいる資格認定であり、継続して研究を行う。

課題としては、①4人の登壇者の講演内容は濃いものであったが、人数が多すぎたようだった。前の海外招聘者の話だけで帰られた方も多かった。じっくり議論してもらう仕掛けが必要。②論点が複数出てきたが、これも多すぎた。さらに焦点化したい。③12月は師走。事前申込60人に対して参加者は43人と7割にとどまった。当初予定していた秋口開催を実現したい。